



牛首別興復社

北海道の十勝地方に、豊頃町とよころがあります。町民憲章の前文に、「先人のたくましい開拓精神と、報徳のおしえをうけつぐ」が掲げられています。十勝地方の開拓が始まった場所です。現在の人口は3,500人ほど。最盛期の30%まで人口が減っています。

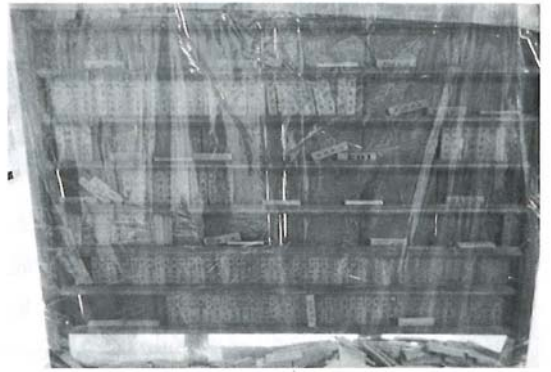
豊頃町で開拓を行ったのは二宮尊親。二宮尊徳の孫です。福島県の相馬で興復社の社長をしていましたが、北海道国有未開地処分法(1897年公布)を機会に、牛首別原野の開拓を開始します。400万坪の土地を、250世帯ほどの農民で開拓する計画です。移住者には5町歩の土地を支給、報徳金の完済時に所有権を譲渡する条件です。相馬地方の農民を救済する自作農づくりのプロジェクトだったわけです(北海道の開拓は不在地主が小作をさせるという形態が多かった)。

尊親は、福島県の相馬で開拓農民を募り、彼らと一緒に牛首別原野に入ります。10戸を単位に開拓者の組合をつくり、助け合う(番組)。毎月20日の午後に開催する例会(芋コジ)。農民の選挙による、力農篤行者の表彰等を行いつつ、厳しい生活規律を定め、心田開発(やる気こそが復興の鍵となるという教え)に取り組めます。地下水位が高い場所のようですから、灌漑等を行ったことが想定されます。土木開発と人間開発の取組みで、10年ほどで開拓を軌道に乗せました。

尊親は開拓10年ほどで相馬に帰り、尊徳の

中嶋哲夫の

「人事も歩けば」



▲例会の出席を管理していた当時の、出席管理板

遺稿の整理に従事します。移住者は牛首別興復社をつくり、心田開発を続けます(現在も例会が維持されています)。広い農場ですから、端っこの開拓者が例会に参加するのは1日ばかりだったでしょう。その熱に頭が下がります。

現在、地域は二宮地区と呼ばれています。地域を見晴らせる尊徳神社に登ると、心地よい風が吹き抜けます。そこからは、二宮農場の主要部分が目に入ります。尊親も見たのでしょう。農場の1区画が広く、ゆったりとしています。作物が植えられた区画と赤土の区画がモザイク模様をつくっています。所々に牧場も見えます。点在する住まいも立派ですから、農業や牧畜業で安定した所得が得られているのでしょう。5町歩の自作農を計画した先見性が、農業の維持につながっているのでしょう。開拓者の子孫もたくさん残っておられると聞きました。

「至誠・勤労・分度・推譲」。報徳の教えを正面から受け止め、困難な事態を打破するためのエネルギー源として仕えた人々に頭が下がります。

(MBO実践支援センター代表 大阪商業大学特任教授)